



Title	アメリカ軍のなかの聖職者たち : 従軍チャプレン小史
Author(s)	石川, 明人
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 117, 31-66
Issue Date	2005-11-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34097
Type	departmental bulletin paper
File Information	117_PR31-66.pdf



アメリカ軍のなかの聖職者たち

——従軍チャプレン小史——

石 川 明 人

1 はじめに

本稿は宗教学的関心から、世界最大規模の軍隊であるアメリカ合衆国軍 (United States Armed Forces) における、いわゆる「従軍牧師」「従軍司祭」の歴史を概観するものである。「従軍牧師／司祭」という日本語はわれわれの使い慣れたものであるが、しかし現在のアメリカ軍には、プロテスタントの牧師、カトリックの司祭だけでなく、ユダヤ教のラビ、イスラム教のイマーム、仏教の僧侶もいる。したがって彼らの総称としては、軍で使われている「チャプレン」(chaplain) という語をそのまま用いた方がよいであろう。

アメリカ軍のチャプレンは、もちろん聖職者であるが、同時に大尉や少佐といった階級をもつ完全な軍人(士官)

である。基本的には、軍人が聖職者になる訓練を受けてチャブレンになるというよりも、聖職者が軍の訓練と教育をへてチャブレンになるのであるが、いずれにしろ「軍隊」が戦争に関する専門組織であり、一方「聖職者」は愛と平和を唱える（べき）者たちであるならば、従軍チャブレンというのは随分矛盾した存在であるようにも見えるかもしれない。いったい彼らは何者なのか。ここではそうした軍隊におけるチャブレン制度の形成と発展のプロセスを概観することを主な目的とする。

現代の宗教学において、「宗教と戦争」「宗教と平和」というテーマは非常に重要なものである。戦争と平和の問題に焦点をあてた宗教史学的研究や神学的議論にはすでに多くの蓄積もある。だが宗教的信仰と特定の軍事組織との関係については、従来まではいわゆる「良心的兵役拒否」のように、信仰ゆえに軍から離れていく側が話題にのぼることはあつたが、従軍チャブレンのように、信仰ゆえにむしろ軍に入ろうとする側に対して目が向けられることは少なかった。実際にそうした軍隊と宗教との積極的な関わりを見ていくと、そこには様々な宗教学的トピックを見つけることができる。例えば、アメリカにおいて国教制度の否定や信教の自由は憲法修正第一条によつて保障されているが、国家による組織である「軍隊」と「宗教」が結びついたチャブレン制度は、いわゆる「政教分離」の問題という観点からも考察の対象となりうるであろう。またアメリカ軍の中には様々な教派や宗教の人間がいるため、アメリカ軍チャブレンは必然的に、一般の聖職者たちよりも早くからエキクメニカルな宗教的活動の実践をせまられた。それらは宗教的多元性ないし多宗教の共生をめぐる話題においても興味深い実例であろう。またそもそも、チャブレン制度という形で聖職者が軍事に協力的ないし加担することに関しての倫理的、あるいは神学的な議論がなされる余地もあると思われる。他にもフェミニズムと宗教、あるいは女性聖職者に関する議論なども含めて、現代において重要な宗教（学）

の諸問題のうち、軍のチャブレン制度に関わらない問題を探すのはむしろ難しいほどである。「戦場」という特殊な環境における「宗教」は、後の時代に表面化する多くの諸問題にいち早く取り組みざるを得なかった。そうした意味で、アメリカ軍チャブレン制度の歴史は、単にアメリカ宗教史の一側面にとどまるものではないとも言える。

ただしこの限られた紙面でチャブレン制度に関連する全ての問題に触れることは出来ないで、ここではあくまで、その歴史的展開を大まかに見ていくにとどめたい。以下では、まずアメリカ軍そのものの誕生を宗教や聖職者との関係とあわせて一瞥し、その後にあらためて、植民地時代から現代にいたるチャブレン制度の発展プロセスを見ていくことにする。

2 民兵・常備軍・チャブレン

現在のアメリカ軍は、陸軍・海軍・空軍・海兵隊の四軍からなり、平時は国土安全保障省のもとにおかれている沿岸警備隊 (United States Coast Guard) も、有事には国防総省 (海軍) の指揮下に入る。また通常は州知事の統轄下にある州軍 (National Guard) も、有事には国防総省の指揮下に入る。第二次大戦後には、陸・海・空・海兵から作戦部隊を集めて単一の指揮官のもとにまとめる「統合戦闘軍」 (Unified Combatant Commands) の制度がつけられ、地域別統合軍として、中央軍、欧州軍、太平洋軍、南方軍、北方軍があり、機能別統合軍として、戦略軍、輸送軍、特殊作戦軍があり、さらに地域別と機能別両方の性格を有する統合部隊軍がある。「アメリカ合衆国軍」は、歴史そのものは浅いにもかかわらず、極めて複雑な組織構造・指揮系統と変遷のプロセスを有しているが、現在では世界

最大の軍隊となっており、その軍事費も他国とくらべて突出しているのは周知のところである。日本を含めて世界中に基地や空母を展開しており、地球上のどこで紛争が起きようとも数時間以内に必要な規模の部隊を派遣できる体制を維持している。しかしかつてのアメリカは、むしろヨーロッパの常識では考えられないほど小規模な軍事組織しかもたない国家であつた。それにはさまざまな理由があるが、現在にいたるアメリカ軍のチャレン制度について見ていくうえでも、まずはこの国における軍事制度自体の独特な歴史に目を向ける必要がある。

アメリカにおける軍事は、建国当初の歴史的背景や地政学的状況ゆえに、入植者自らによる共同体防衛という民兵的な性格が強いものであつた。一七世紀初頭に北アメリカ植民地建設が始まったとき、その小規模な入植地の防衛にあつたのは入植者自らであり、専門の軍隊ではなかつた。基本的には定着農業によつて成立していた入植地には、有事における戦闘を専門とする軍隊を維持する余裕はなかつたのである。新しい土地での軍事的防衛は、いやおうなく一般市民自らの手によるものとして始まつたのであつた。入植者は世界最高水準の軍事技術を有するヨーロッパから来ていたため、先住民からの脅威に対しては、最新の武器によつて武装すれば民兵でもなんとか対処可能であり、必ずしも巨大な常備軍組織を必要としなかつたということもある。植民地防衛は、基本的には市民ひとりひとりの意志によつて支えられていたのであり、その意識が今日の憲法修正第二条、すなわち市民には武器を所持する権利があるという思想にもつながっている。

だが一般の市民が最新の武器を持てば先住民からの脅威に対抗できたとはいえ、そうした武器の操作に関する訓練や貧困層への武器の調達など、共同体全体がまとまつて協力すべき事柄も少なくなかつた。植民者たちの開拓共同体にとつて、自らを守るために構成員が武装することは、権利であるのみならず義務でもあり、特にニューイングラン

ドの植民地では、宗教的義務として理解される傾向が強かった。一七世紀半ばから、ヴァージニアでは家長の武装が要求され、貧しくて武器が調達できない場合は政府が供給することが法で定められてもいた。そして武装の有無のチェックの場となったのは、当時の共同体の中心であった教会であり、日曜ごとの礼拝に銃を持参することさえ求められたという。民兵徴集のための集会、定期的な戦闘訓練、また実戦における敵に対する攻撃も、牧師の説教や祈りで始められるのが珍しくなかった。戦闘の恐怖を克服し、「他者」の殺戮を正当化し、また戦死者の名譽を称えるのも教会と牧師の仕事だったのである。もちろん軍事と聖職者の関わりにはヨーロッパの伝統という文脈もある。だがそれと同時に、当時の北米における共同体防衛は経済的・物理的な諸事情から、戦争に関しては全くの素人の一般市民からなる民兵組織によるしかなく、一般市民によって構成されるその組織と活動は、当時の社会的必然から多くの場合教会や牧師とともになされ、結果として、形式的にも内面的にも、軍事と宗教は強い結びつきを持ったまま発展していったのである。つまり最初から教会や聖職者を中核に据えて軍事活動が営まれたといっても過言ではないのである。現在のアメリカ軍におけるチャブレン制度も、基本的にはその延長線上にあるわけなのである。

先住民との戦争には市民をそのまま兵とする民兵システムによって対応していたが、列強間の植民地争奪戦争はヨーロッパの伝統的な戦争の形を引き継ぎ、戦闘を専門とする組織である正規軍に大きく依拠することになった。特に一八世紀半ばのフランスとの植民地戦争においては、地方に分散する民兵だけでは間に合わず、本国から一万を超える正規軍が送り込まれてきた。それら正規軍は、フレンチ・インディアン戦争後も将来の紛争に備えることを名目に、イギリス植民地内に駐屯をつづけていった。したがって独立革命前のイギリス植民地には、一方では市民が自発的につくりあげた共同体防衛の民兵組織があり、他方では大西洋をこえて本国からやってきた正規の軍事組織という、

形態も由来も全く異なる二つの軍事組織が並存したわけである。この二つの軍事組織は、フランスとの戦いにおいては同じ目的に向かって協同して働いたが、共通の敵であるフランスが撤退し、イギリスが北アメリカ大陸の盟主となつてからは、両者の仲は必ずしも良好ではなくなつていった。民兵は自立的な共同体としての植民地の防衛のために活用されたが、それに対して正規軍は、イギリス植民地体制の強権的な維持を目的とする駐屯軍・占領軍という色彩を強めていったのである。アメリカ植民地の人々からすれば、正規軍はアメリカの自由や自治を押さえ込む抑圧組織と見なされ、同時に民兵組織こそが自由の敵たる正規軍に対して自由と権利を守る組織として意識されるようになっていったのである。こうしてアメリカの伝統として、正規軍という存在に対しては消極的な感情が根強いといわれている。

ところが独立戦争は、単純にイギリス正規軍とアメリカ民兵との戦いだったわけではない。この戦争は、一七七五年、レキシントンとコンコードの戦いによって始まったとされるが、アメリカ植民地連合はすぐに常備軍を組織する必要を感じ、開戦二ヵ月後の第二回大陸議会において「大陸軍」(Continental Army)の創設を決定した。ジョージ・ワシントンを総司令官とするこの最初の常備軍が、各地の民兵と連携しながら戦ったのであった。しかしこれでもってアメリカに常備軍が定着したわけではない。民兵と大陸軍との協力関係も、イギリスという共通の敵がいなくなるそれを維持することは難しくなつていった。自助的・自治的社会の形成を目指した民衆たちの間にあった、巨大な中央政府権力は人民の自由の敵であるという伝統的なポピュリスト感情は、常備軍の拡大を強く抑制するように働いたのである。結局一九世紀をとおして、国土防衛は民兵を主体にしてなされ、対メキシコ戦争、南北戦争などもその主力部隊は民兵であり、西部の発展にともなつて州以下の町や村のレベルでも民兵組織が結成されていった。ところ

がさらに時代が進むと、先住民の問題は重要性が低くなっていった代わりに、国際社会におけるアメリカの役割や利益追求の問題が新たに意識されるようになっていった。これにあわせて軍に関する状況はまた変わってゆき、やがて常備軍の整備・拡大を進めることになっていく。まずはウェストポイントの陸軍士官学校や、アナポリスの海軍兵学校といった軍人の教育機関が整備され、人材の育成に力が注がれる。そして戦車や航空機の発明とともに軍事に関する産業や研究も進み、やがては核兵器が製造・使用されるようになっていく。第二次大戦後には空軍も誕生し、冷戦初期には国家安全保障会議（NSC）、国家軍事機構（後の国防総省）、統合参謀本部、NSC直属の中央情報局（CIA）、などが新設され、最終的には、皮肉にも、当初の伝統的な反常備軍感情とは正反対の、世界最大規模の集中的軍事組織が形成されて現在にいたっているわけである。だが民兵制度がこうした常備軍の発展にともなって消滅したわけではない。二〇世紀になると民兵は「州兵」（州軍、National Guard）という形に発展し（一九一六年国防法）、二一世紀のイラク戦争においても多数の州兵が前線に派遣されている⁷。

民兵組織が教会や牧師とともに成立・維持される傾向が強かったことについては述べた通りだが、常備軍も教会や聖職者と無縁だったわけではない。大陸軍の司令官だったジョージ・ワシントンは宗教の公的価値を十分に意識しており、彼は当時の大陸議会に対して従軍チャブレンの任命を強く呼びかけただけでなく、非番の兵士全員に日曜礼拝への出席を義務づけるほどであった。常備軍にもいち早くチャブレン制度ができたことは、ワシントンの力によるところが非常に大きい。

もちろんチャブレンの存在はアメリカに限ったものではない。アメリカにおけるチャブレン制度がそれまでのヨーロッパの伝統と切り離せないのは当然であるが、そもそも軍隊における聖職者の歴史はずっと昔にまで遡ることがで

アメリカ軍のなかの聖職者たち

き、旧約聖書の「申命記」第二〇章二節以下や、「ヨシユア記」六章二節以下などにもその記述が見られる。⁹だが「チャブレン」という呼称それ自体は、さしあたり次のような四世紀の伝説に由来するとされている。あるところに異教徒のローマ兵がいた。彼はある冬の晩に、寒さに震えている物乞いに出会い、あわれに思つて自分の着ている外套を半分に裂き、それを物乞いに与えてやったところ、その晩、彼は自分が与えた外套を着たキリストの夢を見た。それがきっかけとなり、彼はキリスト教徒となる決心をし、後に軍を除隊して教会に身を捧げた。トゥールのマルティヌスというのがその人物の名であり、現在でもフランスの守護聖人としてよく知られている。彼の外套(cappa)は神の現前を示す旗として、後にも戦いの場で用いられた。この聖遺物を管理する司祭は cappellanus と呼ばれ、やがて軍隊にかかわる全ての聖職者が capellani あるいはフランス語で chapelain と呼ばれるようになり、ここにチャブレン(chaplain)の名称が由来する。「チャブレン」は日本でも、学校や病院付きの聖職者を指す言葉としてそのまま使われているが、これは学校や病院以前に、何よりもまず軍隊付きの聖職者を指す言葉だったのである。¹⁰

アメリカ軍でも陸・海・空・海兵の全てにおいて「チャブレン」の語が使われ、所属の軍によつてアーミーチャブレン、ネイビーチャブレンと言つた呼び方もなされており、さらに軍隊付きのチャブレンを総称して、ミリタリーチャブレンという言葉も普通に用いられている。また従軍チャブレンと一言にいつても、銃弾の飛び交う最前線に行く者もいれば、後方の比較的安全な基地や施設などで任務につく場合もある。前者のような場合、コンバットチャブレンという言葉が用いられることもある。チャブレンはあくまで士官(officer)で経験や能力に応じて階級も異なる。¹¹

チャブレンは、現在では「非戦闘員」であると規定され、武器の携帯や使用は一切禁止されている。その代わりに、下士官から「チャブレン・アシスタント」が選ばれ、彼(彼女)はチャブレンの仕事の補助をしつつ同時に戦闘員と

して銃をもち、チャブレンの安全を確保する。しかしヨーロッパでも一七世紀ごろまでは、チャブレンも武器をもって兵士と共に戦うのが全く普通のことであった。その伝統はアメリカでも引き継がれ、植民地時代のアメリカにおける民兵のチャブレンにとって、宗教的責務と戦闘とが明確に区別されることは少なかった。一六〇七年のジェイムズタウンの設立以降、まずは先住民との戦い、そしてフランスの政治的経済的支配に対する戦いなどがあつたが、植民地民兵らと共に戦つてその勇猛さにおいて伝説的存在になつていくチャブレンもいる。現在では従軍チャブレンは、国際的な取り決めとしても「非戦闘員」と規定され、少なくとも建前上は、捕虜になつた場合も戦闘員たちとは異なる扱いを受けることになつていく（一九四九年のジュネーブ条約¹²）。

3 チャブレン制度の形成

では本章以下からあらためて、植民地時代から現在にいたるチャブレン制度の展開を見ていくことにしよう。¹³

既に述べたように、ジェイムズタウンが設立された初期のころから、聖職者は民兵らによる戦闘に付き添つていた。ピーコット戦争（一六三七年）に従軍したサミュエル・ストーンがイギリス領アメリカにおける最初のミリタリーチャブレンとされている。¹⁴ 現在よりも宗教がアメリカ人の生活の中で重要な役割を担つていた当時、牧師はそれぞれのコミュニティの中で最も権威をもつていた。植民地軍は戦闘を行う際、現地であるべく若く頑強な牧師をリクルートし、ごく小規模な軍事作戦においても、事前に牧師によつて戦闘員に何らかの助言や祈りがなされないことはなかった。一六九〇年ごろ（ウィリアム王の戦争）には、二五〇〇名の植民地民兵に対して五名のチャブレンが同行し、フレ

アメリカ軍のなかの聖職者たち

ンチ・インディアン戦争（一七五四—一七六三年）時には一度に三一名のチャブレンが従軍したと記録されている¹⁵。そうしたチャブレンたちの詳細については不明だが、彼らの半分はマサチューセッツから、四分の一はペンシルバニアの出身者で、教派のうえで最も多数派だったのは会衆派、そして長老派や監督派も多かった。それらの戦いの間、若きジョージ・ワシントンは、全ての部隊はチャブレンと密接なつながりを持つべきだと考えていたが、実際はその数が不足していることを嘆き、ヴァージニアの知事にチャブレンの公認を求める文書も送っている。当時のチャブレンは軍の中でまだ公式な存在ではなく、事実上はボランティアであった。したがってチャブレンたちをまとめる組織も無かったが、それでも彼らは説教、祈り、民兵との交わりなどをそれぞれ分担して行い、互いに助け合って各々の任務を遂行していた。

独立戦争にも多くのチャブレンが従軍した。多くのニューイングランドの聖職者たちはコンコードで任務につき、ジョセフ・タクスター、エドムンド・フォスター、フィリップ・ペysonらはマスケット銃を手に取り他の兵士たちと同じように戦ったと伝えられている。特にペysonは、マスケット銃をつかんで自ら隊の先頭に立ち、積極的に攻撃を指揮したという。そもそも当時は、聖職者が自ら教会の会衆や地域の中から人を集めて軍事部隊を結成することも珍しいことではなかったのである¹⁶。もちろんあくまでも聖職者としての任務に専念した者もあり、その一人がウィリアム・エマーソンである。よって彼が独立戦争における初めての純粋な意味でのチャブレンだという見方もできるかもしれない。大陸議会は一七七五年七月二九日にチャブレンを正式に認可し、これがアメリカにおける「チャブレン制度の誕生日」だとされている¹⁷。チャブレンの給与は大尉のそれと同額と定められ、当時は一五名のチャブレンが任務についていた。また一七七八年にはベンジャミン・バルクが最初の海軍チャブレンとして採用されている。ヴァー

ジニアではワシントンの要求で一七五八年にチャブレン制度が制定されていたが、一七七六年まで実際には誰も任用されなかった。独立戦争勃発の一七七五年から講和条約調印の一七八三年までの間、約二三〇名のチャブレンが、あらゆる戦場で兵士たちのために祈り、説教し、負傷者や死にゆく者を慰めた。一七七七年にジョン・ロスブルという牧師が戦闘中に死亡し、彼が正式なチャブレン制度発足後初めての戦死者となった。

この戦争でチャブレン制度は、必要なときにボランティアのチャブレンをその都度採用するという、いわば行き当たりばったりの形で始まったが、最終的には、各旅団ごとにチャブレンが任用されるという制度を形成するようになっていった。基本的には彼らの全てがプロテスタントのチャブレンだったが、カナダの連隊や西部からのボランティアのチャブレンの中にはローマ・カトリックの者がいた。最初のローマ・カトリック・チャブレンは、カナダ人司祭のルイス・ユースティス・ロトビニエである。彼は六〇歳という高齢にもかかわらず、戦争が終わるまでその任務をまっとうし、戦後はフィラデルフィアで暮らして七一歳で亡くなった。このころから、プロテスタントのチャブレンがカトリックの兵士たちの礼拝を行ったり、逆にカトリックのチャブレンがプロテスタントの兵士たちの礼拝を行うのは全く普通のことであった。ローマ・カトリックのチャブレンとして初めての戦死者は、メキシコ戦争（一八四六—一八四八年）に従軍したジョージタウン大学教授でイエズス会士だったアンソニー・レイである。後に「チーフ・オブ・チャブレン」という全チャブレンのトップに立つ役職がつくられるが、第二次大戦時のチーフ・オブ・チャブレンはカトリックの司祭であった。

この時代にチャブレンとして従軍したエイブラハム・ボールドウィンは、戦後には憲法制定議会のジョージア代表者として憲法署名者三九名のうちの一人になり、さらにジョージア大学の理事・設立者にもなった。同じくチャブレ

ンとして従軍したティモシー・ドゥワイトは、賛美歌の作者としても知られるようになったが、イエール大学の学長としても有名な存在となった。従軍チャブレンの中には戦後もリーダーシップを発揮して、アメリカ合衆国の発展、特に政治や教育の分野に大きな貢献をした者も少なくなかった。後の時代にはジョセフ・ウィルソンのように、自分の息子を合衆国大統領に育てあげたチャブレン経験者もいる。ジェファソンの政権下でウェスト・ポイントに陸軍士官学校が建てられたのは一八〇二年だが、兵士たちに読み書きをはじめ何らかの学問を教えるという仕事は以前からチャブレンの仕事の一部であった。一八一八年には、この士官学校に配置されるチャブレンは単なる聖職者であるだけでなく、地理・歴史・倫理学の教授でもあると規定され、給与等の待遇は数学の教授と同じとするように定められた。一八三八年にはその他の基地付きチャブレンについても、教師としての責務が公式に規定されるようになった。単に兵士たちの精神的・宗教的なケアを担当するだけではなく、歴史や倫理学といった学科を教える教育上の役割は、のちのちまでもチャブレンの仕事の重要部分となっていく。しかしそうとはいえ、一九世紀のチャブレンは必ずしも高等教育を受けた者たちばかりではなかった。やや例外的なケースであるとは思われるが、年をとった外科医や定年退職した料理人などの非聖職者が、連隊の宗教的仕事を行うためにチャブレンとして任命されることもあったという報告もあるからである。独立戦争が終わり合衆国憲法が発効されたころのチャブレンの給料は、食費・飼料代込みで月額五〇ドルであったという記録があり、一八一三年に制定された法律は常備軍の旅団付きチャブレンには「少佐」と同じ給料と特権を与えているとしていた。¹⁸だが翌一八一四年に制定された法律は常備軍の旅団付きチャブレンには「少佐」きチャブレンには「大尉」と同じ給料と特権が規定されている。¹⁹

民兵制度から常備軍のおかれる時代に移ってもチャブレン制度は維持されていたが、こうした軍隊に聖職者をお

くという制度に対する批判は、すでに一八五〇年ごろから起きていた。一七九一年の権利の章典（憲法修正第一条）においてすでに政教分離・信教の自由が明文化されていたが、一九世紀半ばから、連邦政府によるチャブレンの雇用は憲法違反だという声が起こりはじめたのである。だが司法委員会はチャブレン制度を擁護し、結局それが廃止されるにはいたらなかった。軍隊（常備軍）が国家による組織である以上、軍のチャブレン制度と政教分離の理念とをどのように整合させるかは微妙な問題になるが、軍は特定の宗教を推奨するのではなくあくまで兵士たちのニーズにこたえるための環境をつくるという建前によって、二一世紀の現在でもチャブレン制度は十分な規模において維持されている。宗教を軍隊内から排除することによってではなく、逆にあらゆる宗教の聖職者を認めることによって公平性を保とうとしているようにも見える。後にも触れるが、ユダヤ教徒チャブレンは南北戦争の時期に現れ、二〇世紀末にはムスリムのチャブレンが、その少し後には仏教徒のチャブレンも現れる。そしてさらに時代がすすむと、軍において魔術崇拜（Wicca）さえも一応認めることとなり、チャブレンは現れてはいないが、兵士個人の認識票（いわゆるドッグタグ）の宗教の欄にその名を刻印することさえ許されるようになっていくという。²⁰二〇〇五年現在、チャブレンの徽章（襟などにつけるバッジ）には、ラテン十字（キリスト教）、モーセの石板とダビデの星（ユダヤ教）、三日月（イスラム教）、法輪（仏教）の四種類のデザインのものを用意されている。²¹

第二次米英戦争から一八五〇年代半ばまでの間に任命されたチャブレンは八〇名にのぼるが、この時代の教派の内訳は、監督派が四三名、長老派が一名、バプテストが五名、メソヂイストが三名、ローマ・カトリックが三名、ユニヴァーサリストが一名、オランダ改革派が一名、ルター派が一名、そして不明が一二名となっており、まだ全てがキリスト教徒チャブレンで占められている。²²

4 南北戦争とその後のチャプレン制度

南北戦争（一八六一—一八六五年）の時代のチャプレンは、大きく連隊付きチャプレン、基地付きチャプレン、病院付きチャプレンという三つに分類することができる。この戦争の四年間で、合計約三〇〇〇名のチャプレンが連邦軍に参加した。最も多かった時期には一度に一〇七九名のチャプレンが働いていたが、そのうち九三〇名が連隊付きチャプレン、一一七名が病院付きチャプレン、三二名が基地付きチャプレンで、うち六六名が命を落としたという。²³この時期のチャプレンについては詳細な記録も残っており、彼らほとんど全員の名前なども確認することが出来る。

戦争が始まった一八六一年当時、チャプレンとして任命されるための条件の一つは「何らかのキリスト教諸派から聖職者としての資格を得ている者」とされていたが、それは翌六二年には、「何らかの宗教団体 (religious denomination) から聖職者としての資格を得ている者」という表現に変えられた。こうした変更は、ひとえにユダヤ教徒のチャプレンを承認するために他ならなかった。南北戦争で初めてユダヤ教のチャプレンが誕生したのである。だが従軍チャプレンはボランティアとして自発的に従軍するものも多かったため、事実上最初のユダヤ教徒チャプレンと、公式に承認された最初のユダヤ教徒チャプレンとは同一ではない。まず事実上最初のユダヤ教徒チャプレンは、第五ペンシルバニア騎兵隊の士官らによって任命されたマイケル・ミッチェル・アーレンである。しかし彼はすぐに、キリスト教徒ではないという点から解雇されそうになったため、解雇という不名誉よりも「健康不安」を理由に辞任することになった。同連隊は後にアーノルド・フィチエルというラビを任命しようとしたが、これもまた議会によって否決さ

れてしまう。そこでようやく多くの疑問の声があがり、様々な陳情書が議会に送られ、ロビー活動も行われた結果、先に述べた一八六二年の規則改訂にいたる。こうして公式に認められたユダヤ教徒チャブレン第一号として、ジェイコブ・フランケルが選ばれ、彼はこの戦争が終わる六五年まで従軍したのである。

アメリカの軍の部隊がかつては人種ごとに編成されたことはよく知られているが、南北戦争は黒人部隊が大規模に用いられた最初の戦争である。当時士官とチャブレンは専ら白人だったが、終戦時には一五八あった黒人連隊のうち一二の連隊は黒人チャブレンを採用していた。最初の黒人チャブレンはヘンリー・マクニール・ターナーで、ボルチモア出身の牧師だった。彼も終戦までチャブレンとして働き、戦後はジョージア議会のメンバー、アフリカン・メソジスト・エピスコパル教会の監督などとして活躍した。またこの戦争でもう一つ注目すべき事柄は、初めて女性チャブレンが登場したことである。その人物の名はエラ・ギブソン・ホバートといい、彼女の夫もチャブレンであったが、自らも第一ウイスコンシン連隊のチャブレンとして任務についた。ところがホバートは一八六四年、終戦の一年前に、女性であることを理由に承認を取り消されてしまう。その後、公式に女性チャブレンが現れるのは一九七四年、つまりホバートからちょうど一一〇年の月日待つ必要があった。

この時代のチャブレンは慣習として大尉の位にあったが、彼らの制服や徽章は常に議論的となっていた。一八六一年の一般命令では、チャブレンはブレインな黒のフロックコートにスタンドカラー、そして一列に並んだ九つの真鍮ボタン、黒のパンタロンに黒のフェルト帽あるいは軍の制帽というものであった。

この南北戦争では勇敢なチャブレンに関するエピソードも多く残されており、何人かのチャブレンは名誉勲章を授与されている。戦火の中で死にゆく兵士たちに最後の祈りをしたチャブレンもいれば、率先して隊の先頭を歩き、そ

アメリカ軍のなかの聖職者たち

の勇猛な振る舞いで兵士たちを鼓舞したチャブレンもいた。この時代にはまだ戦う聖職者の精神が残っており、一部のチャブレンは積極的に戦闘行為にも加わっていた。だが同時にこのころからチャブレンの仕事も多様なものになっていく。最も重要な仕事が礼拝であることは言うまでもないが、それはしばしばプロテスタントとカトリックそれぞれのチャブレンが状況に応じて分担して行うエキュメニカルなものでもあった。すでに述べたように、兵士たちに読み書きを教えることも多く、さらに負傷兵や瀕死の者のために彼らの家族への手紙を代筆することも少なくなかった。チャブレンたちの説教の話題は、信仰や愛国心に関することだけでなく、生活態度、例えば口論・ギャンブル・飲酒などに関する訓戒も多く、実際に部隊の中に禁酒クラブをつくることもしばしばなされたようである。

南北戦争が終わると、後の米西戦争の時期まで軍は大幅な削減を行うことになる。ただしこのころに黒人のチャブレンはその数を大きく増やし、一八九八年までには黒人部隊のチャブレンは全て黒人になっていた。その中のひとり、アーレン・アレンズワースはケンタッキーで奴隷として生まれた人物で、南北戦争では陸軍と海軍の両方で戦いに参加し、やがて一八八六年から一九〇六年までの二〇年間をチャブレンとして過ごしたが、引退するときには彼は中佐の位にまでのぼっていた。それは黒人チャブレンとしてのみならず、当時の全ての黒人の軍人の中で最も高い階級であった。

ところでこのころのチャブレンたちにおけるインディアンへの対応はアンビヴァレントなものだったと言われている。一部のチャブレンたちはインディアンを野蛮人とみなして彼らを攻撃する一方で、他のチャブレンたちは彼らに洗礼をさずけたりするなど友好的な態度をとった。カトリックのチャブレン、エドワード・ヴァトマンは『スー族兵士の語彙集』を編纂し、合衆国の歴史と地理をスー族の言語に翻訳するなどした。この南北戦争では、チェロキー

の首長の息子であつたウナグスキイが、先住民出身者として初めてのチャブレンになつてゐる。²⁴

また、教育から手紙の代筆までさまざまな仕事をこなすチャブレンであつたが、このころは必ずしも軍の中の全ての者がチャブレンたちの存在を歓迎していたわけでもなかったやうである。士官と下士官が一緒の場で礼拝することと不満を持つ者もあり、チャブレンが推奨する禁酒運動をうつとうしく思うだけでなく、そもそもチャブレンが大尉などの階級を持つことに異議もつ士官も少なくなかつた。中には確かに、決して有能であるとは言えないチャブレンも存在したからだという。そこでチャブレンの質を一定以上に保つために、オーヴィル・J・ネイブは各教会の代表者から成る「統一キリスト者委員会」をつくり、それぞれの教会にチャブレン志願者の資質や性格を保証するように求めた。一八九〇年にローマ・カトリック教会はチャブレンとしての司祭をリクルートするための委員会をつくり、プロテスタント諸派も一九世紀の終わりまでには同様の組織を形成してチャブレンの質を高いレベルで維持するやうに努力した。

一八九八年に米西戦争が始まつたが、これはチャブレンが国外へ出たものとして最初の戦争であり、また一八八二年に合衆国がジュネーブ条約にサインをして以来、チャブレンが公式な形で「非戦闘員」と規定されて任務についた最初の戦争でもあつた。ちなみに、後にペンタゴンを設立し第二次大戦でマンハッタン計画の指揮をとつたレスリー・R・グローブス・Jrの父親、レスリー・R・グローブスは、この戦争で第八歩兵連隊のチャブレンであつた。またラフ・ライダーズという呼称で知られる合衆国第一騎兵隊のチャブレン、ヘンリー・A・ブラウンは、彼の上官で当時大佐だつたセオドア・ルーズベルトから二度も公式な賞賛を得ている。後にルーズベルトが大統領になつてから陸軍は大きく発展することになるが、彼はチャブレン制度に関してもさらなる質の向上を求めた。そして現に一八九九

年から一九二〇年の間に、チャブレン部隊は単なる軍の付属物といったイメージから脱却し、小規模ではあるがまとまりのとれた専門家の部局へと成長していったのである。まず一貫した候補者選抜の方法がつけられ、一九〇九年には陸軍省との連絡を効率的に行うために「チャブレン審議会」も設立された。現在のものと同様のラテン十字をかたどったチャブレン用の徽章が制定されたのは一八九九年であり、一九一四年には階級徽章を着けることも認められた。

この時期の最も重要な改革は、一九〇九年における「チャブレン・アシスタント」制度の設立である。チャブレン・アシスタントとは、文字通りチャブレンの仕事の補助を行う要員であるが、チャブレンとの一番の違いは、チャブレンはあくまで士官であるのに対して彼（現在では女性もいる）は下士官の中から選ばれ、チャブレンが非戦闘員である一方でアシスタントはあくまで戦闘員であるところにある。約一三〇年にわたるそれまでのチャブレン制度の歴史の中でも、チャブレンの補助をする兵士がいなかったが、それらは全てチャブレンとその兵士との個人的な関係によってのみ成り立っているものであった。それがこの時代になって、専門的な技術をもつ下士官として正式にチャブレン・アシスタントという身分がつけられたわけである。これによってチャブレンの安全が向上したと同時に、その仕事の効率もよくなっていった。第二次大戦のころには、チャブレン・アシスタントは礼拝の補助のみならず、ジープやトレーラーの運転・整備からタイプ打ち、オルガン演奏、聖歌隊の指揮など様々な仕事を行った。下士官の中から訓練をへて選ばれるチャブレン・アシスタントは、現在の宗教サポートプログラムにおいても極めて重要な役割であり続けている。

チャブレンたちは国内外で兵士のためにさまざまな仕事を行っていたが、このころになると装備に関する様々なりクレストもなされるようになってくる。上官に映写機、蓄音機、レコード、オルガン、書籍などを要求するチャブレン

ンもいた。というのも、兵士たちに何らかの娯楽を提供することは、しばしば退屈さゆえに売春婦を買って性病にかかるとリスクを減少させるのに効果があったからである。後々までも、兵士たちに対して性病に関する教育をすることはチャブレンの仕事の一つとして大事なものであった。第一カンザス連隊チャブレンのジェームズ・ナイスミスは、兵士らの有り余るエネルギーを発散させるために運動会などを主催することによって、性教育プログラムの補足にしたともいわれている。

5 第一次および第二次世界大戦

第一次大戦も、アメリカ軍チャブレン制度が組織としてさらに洗練されたものとなる重要な契機であった。

アメリカは宣戦布告と同時に大規模に兵を動員し、それまで正規軍と州軍合わせて一四六名だったチャブレンに、新たに二二七名ものチャブレンを加えた。この戦争をとおしてチャブレンたちは、塹壕、集会場、村の教会、森の中など様々な場所や環境で礼拝を執り行い、全ての兵士らのためにエキシメニカルな活動をおこなった。戦闘の後には、チャブレンは死体を集めてきちんと埋葬をし、それが済むと埋葬記録をつけ、戦死者のフルネーム、部隊、戦死日時などを正確に記録し、地図上の位置も確認したうえで本部に報告した。それが終わると負傷兵を見舞うために病院へ行き、近親者に手紙を書いたりもした。多くの者が賞賛に値する働きをして、二七名がパープル・ハート勲章、四名がオーク・リーフ・クラスター勲章、二七名が殊勲十字章、一八名がシルバー・スター勲章を授与された。アメリカだけでなく、フランス、英国、ベルギーなどから勲章を授けられた例もあったという。この戦争で二三名のチャ

アメリカ軍のなかの聖職者たち

ブレンが任務中に亡くなったが、そのうち一一名は戦闘中の死であった。

南北戦争と同様に多くの黒人が陸軍に加わったが、この時の黒人チャブレンの数は一〇八名であった。南北戦争以来、ユダヤ教徒のチャブレンはいなかったが、遠征軍には五万名ものユダヤ教徒兵士がいたので、ユダヤ教福祉会議のチャブレン・コミッティは三五名を陸軍省に推薦し、そのうち二五名が停戦までの間にそれぞれの任務についた。当時ユダヤ教チャブレンは、JWB (Jewish Welfare Board) の文字をその襟元につけていたが、一九一八年一〇月に、現在のと同じ形である、モーセの石板とダビデの星をかたどった徽章が公認された。

第一次大戦時におけるチャブレン制度のもっとも際立った変化は、その組織化がさらに進んだ点である。当時は二〇〇万もの兵力をフランスに展開していたが、しかし司令部はどこにどれだけのチャブレンがおり、彼らの教派は何かなどについてほとんど十分に把握できていなかった。アメリカ遠征軍の司令官パーシング大將はこうした状況を改善すべく、監督派のチャブレンであるチャールズ・ヘンリー・ブレントをアメリカ遠征軍チャブレン理事会の会長に任命した。ブレントは能力あるチャブレンを師団付きにし、経験の浅いチャブレンのための訓練機関を設立するなどした。そのようなブレントによる一連の整備をもとに、戦争が終わってすぐ、一九二〇年にチャブレン長 (chief of chaplain) の制度が誕生し、ここにチャブレン制度は初めて軍の中で十分に組織化された部局となった(チーフ・オブ・チャブレン・オフィスの設置²⁶)。初代のチャブレン長は会衆派のジョン・トーマス・アクストンで、その後はメソヂイスト、バプテストなどのチャブレンがチャブレン長となったが、一九三七年にはローマ・カトリックのチャブレン長が誕生した。ウィリアム・R・アーノルドがその人で、彼は第五代目のチャブレン長として第二次大戦を通してその役職についた。

公式のチャブレン訓練は、ヴァージニアのフォート・モンローにチャブレンとチャブレン候補者のための施設が建てられた一九一八年から始められた。すぐにその教育施設はケンタッキーのキャンブ・ザツカリー・テイラーに移動し、国際法、軍法、応急手当から馬術などをも含んだ五週間のカリキュラムが組まれた。民間の神学校は一人の人間を聖職者に育て上げるが、陸軍のチャブレン・スクールは、そうした宗教上の専門家をあつめてさらに陸軍士官として必要な軍の規則や習慣をおしえるものであつた。そしてさらに理事会は、新しく任命されたチャブレンのために、その者自身の教派とは異なる教派に属している兵士たちへの宗教活動を訓練するベーシック・コースをつくることも命じた。チャブレン訓練施設は後にもイリノイ、ミシガン、カンザスなど様々な場所へと移動を繰り返して、現在はサウスカロライナのフォート・ジャクソンにチャブレン・センター&スクールという施設をつくり、訓練と研究が行われている。

チャブレンは戦場や基地でいわば何でも屋のような存在になりがちであつたが、一九二三年の陸軍規則改訂により、チャブレンは緊急事態などをのぞいて、軍の中では聖職者としての仕事に専念するように定められるようになった。しかし実際には多くのチャブレンは、礼拝や洗礼、結婚式、葬式といった基本的任務の他にも、講演を行ったり民間組織と協力して福祉活動を行うことが多かった。前に、性病に関する知識を教えることもチャブレンの仕事の一つだったとのべたが、この時代においても、そうしたセックスに関する衛生指導は事実上彼らの大事な仕事の一つであり続けたようである。兵士たちへの教育という面では、道徳的な内容の事柄のみならず、地理や歴史といったものも依然として求められた。そこでチャブレンたちは、軍の他のどんな者たちよりも先に、映画やスライドといった道具・機材を自らの任務に活用した。二〇年代からは映写機やレコードプレーヤーの他にも、ポータブル・タイプライターや

折りたたみ式オルガンなども使用されるようになった。ところでこの第一次大戦の時期、一九一八年、チャブレンから階級徽章を外させる規則が新たに制定された。だがこれに対してはチャブレンたちの反対が多かった。階級徽章をつけないでいることは下士官や兵から見てもチャブレンの地位を低めてしまう、という懸念が徽章取り外しに反対の理由であった。その時のチャブレン長だったアクストンもその決定に反対し、一九二六年には再び階級徽章の着用が認められるようになり、また経験や能力に応じて大佐まで昇進しうることも認められるようになったのである。

それぞれの戦争が終わるごとにその規模を縮小してきたアメリカ軍であるが、一九四〇年になると陸軍は再度その規模を拡大しはじめ、その翌年には八〇億ドルもの予算がまわされるようになっていった。

日本軍が真珠湾を攻撃したまさにその場所にもチャブレンはいた。日の丸をつけた戦闘機の襲来が始まったのを目撃したチャブレンのテレンス・P・フィネガンは、すぐに砲兵隊のところへ車を走らせて事態を警告した。チャブレン・アシスタントたちのうち数名は、反撃のための機関銃を準備している最中に戦死した。第二次世界大戦の間には、陸軍だけでも合計八八九六名のチャブレンが任務につき、一九四五年に日本が降伏したときには八一九一名が従軍していた。その教派の内訳は、プロテスタントのチャブレンが五六二〇名、カトリックのチャブレンが二二七八名、ユダヤ教徒のチャブレンが二四三名であった。²⁷この戦争でチャブレン部隊には四七八名もの死者がでた。それは戦争全体の犠牲者の数からすればさほど多くは無いが、一つの部局における犠牲者の割合としては、歩兵隊と航空隊に次ぐ多さであった。というのも陸軍チャブレンには、つねに兵士につきそって彼らの宗教的サポートをするという「そこにいる哲学」(“be there” philosophy)があったからだという。²⁸チャブレンたちは、自分らは常に兵士らとともに「前に」いなければならない、と考えていたのである。

ところで第二次大戦がそれまでの戦争とまったく大きく異なるのは、何よりも航空機が本格的に活用された初めての戦争だったという点である。大型の艦船とそれに搭載した巨砲ではなく、空母と航空機の使用が作戦のなかで大きな重要性をもつようになったのである。アメリカに独立した軍としての空軍が組織されるのは戦後のことであるが、当時すでに陸軍と海軍それぞれが航空隊をもっていた。そしてそれにあわせて、一部のチャブレンも航空隊に配属されるようになっていったのである。彼らはテキサス州サンアントニオの航空隊学校で二週間の特別訓練を受け、また同様の訓練コースがチャブレン・アシスタントとして働く下士官のためにも用意された。最終的には一〇八九名のチャブレンと九三九名の下士官がそのコースを修了して各部隊に配属された。だが中には、さらに落下傘降下訓練学校で訓練を受けたチャブレンもいた。多くの危険がともなう落下傘部隊において、チャブレンは兵士たちと強い絆を持つことが重要であつたため、チャブレンもまた彼らと共にパラシュートを着けて飛び降りることが求められたのである。レイモンド・S・ホールがパラシュートを背負った最初のチャブレンであつた。一九四二年には、航空隊のチャブレンは「エア・チャブレン」(Air Chaplain)と呼ばれるようになった。その七年後に独立した軍として空軍が設立されると、チャールズ・カーペンターが空軍における最初のチャブレン長に任命された。

また、これまでは、チャペルを持つている基地はわずか一七に過ぎなかったが、一九四一年にルーズベルトは六ヵ月以内に六〇四のチャペル建設を承認するという書類にサインをし、宗教サポートはより充実したものになっていった。チャブレンたちはそれまでと同じように礼拝、説教、結婚式、葬式、カウンスリング、また病人や怪我人の見舞いを行ったが、中でも重要だったのは兵士ひとりひとりのカウンスリングであつた。チャブレンは礼拝堂だけでなく、訓練地、射撃場にも顔を出し、ガスマスク訓練にも加わりながら、兵士たちの悩みに耳を傾けた。相談事の多く

は、軍隊生活への適応に関する問題も多かったが、他にはホームシック、自殺願望、結婚に関するものやアルコール問題などもあったという。多くの兵士はチャブレンを信頼し、心配事や悩み事などについては、しばしば「チャブレンに話してみなよ」(“Tell it to the chaplain”)というフレーズが使われたといわれている。輸送船の中などでは、一人のチャブレンが多くの異なる宗教的ニーズに応えることもしばしばであった。単に礼拝やカウンセリングをおこなうだけでなく、ちょっとした運動会やボクシングの試合、また映画上映会などを開くことで兵士たちのストレスを和らげることも多かった。

この戦争におけるチャブレン関連の話題として今でも多く語り継がれているのは、大勢の兵士を運んでいた輸送船ドーチェスター号の事件である。一九四三年、その船は九〇二名の兵士を載せて北大西洋を航行していたが、それをドイツの潜水艦U二二三が魚雷で撃沈したのである。これによる死者六七五名のうち四名はチャブレンであった。クラーク・V・ポリング(オランダ改革派)、ジョージ・L・フォックス(メソヂスト)、ジョン・P・ワシントン(ローマ・カトリック)、アレキサンダー・D・グード(ユダヤ教)である。彼ら四人は、混乱する船の中で自らのライフジャケットを他の兵士に与え、沈んでいく船の中で懸命に兵士らの脱出の手助けを行った。生き残った兵士たちが救命ボートからドーチェスター号を振り返ると、沈んでいく船のデッキに立った四名のチャブレンたちが互いに腕を組み合い共に祈っている姿が見えたという。この彼らの勇敢な最期については本も書かれ、四人の顔と沈んでいく船をデザインした切手もつくられている。現在でもこの出来事のあった二月三日は「フォーク・チャブレンズ・デー」とされ、教派や宗教をこえた宗教的自己犠牲の象徴として記憶されている。

黒人チャブレンも、この戦争では七九〇名が任命され(陸軍)、四二年までに二四七名が従軍した。またこの時に、

全員がギリシャ系から成る大隊のためにギリシャ正教のチャブレンが承認された。仏教徒チャブレンも一応承認はされたものの、しかし日系人から成る第四四二歩兵隊に就任することは無く、そこには代わりに日系のキリスト教徒チャブレンが付いたと記録されている。²⁹ 陸軍女性補助部隊 (Woman's Army Auxiliary Corps) が設立されたときには、女性のチャブレンも承認されるべきだという声もあがったが、結局女性チャブレンが生まれることはなかった。しかし多くの女性聖職者が、チャブレン・アシスタントや宗教教育の監督者になりそれぞれの役割を果たした。

終戦直後には、捕虜に宗教上のサポートを行うチャブレンも多かった。また強制収容所から解放された人々の面倒を見るために、ユダヤ教徒のチャブレンが特別に集められ、家族と離れ離れになった人達を再会させる手助けをした。シナゴグを建てて孤児たちの世話をしたという。占領軍がアメリカ人のコミュニティをつくると、合衆国から士官や下士官の家族たちも到着した。それらのコミュニティは聖職者を必要としたので、軍のチャブレンがそれにあたり、ヨーロッパとアジアの両方でアメリカ的な宗教的実践が行われたのである。³⁰

6 冷戦とその後のチャブレン制度

一九四五年には合衆国陸軍チャブレン理事会がつくられ、一九四九年には新しく出来た空軍チャブレン部隊に陸軍チャブレンを加えることも認められるようになった。また退役軍人省にチャブレン・サービスが新たに設立されたのもこの時期である。独立した軍として空軍ができた後も、空軍チャブレンは陸軍のチャブレン・スクールで訓練を受けたが、やがて空軍独自のチャブレン養成機関をつくり、海軍もそれに続いた。現在では、海軍・海兵隊・沿岸警備

隊のいずれかでチャブレンとして任務につく者は、海軍のチャブレン・スクールで訓練を受けることになっている。陸軍のチャブレン・スクールでは、一九五〇年にチャブレン・アシスタント（下士官）のための訓練プログラムも用意されるようになった。

朝鮮戦争には約一五〇〇名のチャブレンが従軍し、捕虜になった者も少なかった。捕虜のまま死んでいった者もいたが、過酷な環境の中でも仲間の捕虜たちの面倒を見て、死後に部隊功労賞を授与されたチャブレンもいた。戦争が終わると、チャブレンたちはアメリカ本国の教会に物資の援助を求めるなどして、朝鮮の復興にも尽力したようである。この時期の新たな動きとしてまず挙げられるのは、軍とその家族らのあいだで、平信徒たちによる自発的な宗教的グループが形成されたことである。それはプロテスタント信徒らによるものや、プロテスタントの女性信徒によるもの、さらにはカトリックやユダヤ教徒による平信徒組織もつくられ、それぞれが信仰に基づいたネットワークの中で助け合っていた。³¹ 宗教的な考えや実践において何らかの共通性を確保しようとする考えは、宗教教育などの面にも適用されていく。チャブレンは日曜学校を開いていたが、そこには共通のカリキュラムが無かったため、陸・海・空・海兵のアメリカ軍事組織全体において共通な宗教プログラムが提案されたのである。一九五三年から一九五四年にかけて「軍事組織のためのプロテスタント日曜学校統一カリキュラム」、「カトリック・ファミリーのための宗教指導プログラム」、「軍事組織におけるユダヤ教徒のための宗教学校カリキュラム」がつくられた。さらには、兵士たちのために祈りや瞑想の場を提供するために「宗教静養センター」も設立された。最初のそれは、ドイツにあったナチス航空隊の宿泊施設だったものを改装したもので、すぐにそれはヨーロッパにおける軍の宗教的集まりの中心になった。それからすぐに、同様の施設は日本にもつくられた。極東に配属されていた陸軍チャブレンのジョン・A・

ダンがある時ドイツのその施設を訪問し、同じものをアジアにも作ろうと考えたのである。それは大磯に、著名なチャブレンであったエミール・J・カバウンにちなんで「カバウン宗教静養ハウス」という名称のものとして設立され、一九五四年から三年間維持された。またチャブレンの教育プログラムについても検討が重ねられ、特にカウンセラーとしての能力を高めるために、「臨床的牧会教育」(Clinical Pastoral Education)などが重視されるようになっていった。

ベトナムへのアメリカの介入は一九五〇年代から始まっていたが、戦闘部隊が送り込まれたのは一九六一年の一二月になってからのことであった。翌一九六二年にベトナム軍事援助司令部(MAVC)が設置され、ベトナム全土に三〇〇〇名以上の人員が配置された。チャブレンが加わったのもこの時からである。はじめのころは、わずか八名のチャブレンがヘリコプターなどを利用して六〇〇マイルにわたる長い国土をカバーしていたものの、一九六七年には、陸軍チャブレンだけでも三〇〇名という規模にまで増加していた。この戦争の最中には、アメリカ国内でもさまざまな反戦運動が活発になされたが、この戦争がこれまでのものと大きく違うことの一つは、軍の中から多くの「良心的兵役拒否者」が出るようになっていたことである。そこでチャブレンたちには、そうした兵士たちにカウンセリング・インタビューをして、彼らの宗教的信念とその誠実さについて審判をするよう求められたのである。良心的兵役拒否という主張をどのように理解し審判するかという方針については必ずしも一定したものがあったが、やがて「軍事組織における良心的兵役拒否者のインタビューに関するガイドライン」がつくられ、それを参考にすることになった。この戦争でのもう一つの新たな問題はドラッグである。軍の中における薬物の広がりには歯止めをかけるために、ドラッグ使用者のための祈りの会も設けられ、チャブレンたちは各部隊で反ドラッグの教育プログラムを受けること

もあった。また、軍の礼拝の際に使用するオルガンが足踏み式から電気式のものになり、カセットレコーダーなども使われるようになったのもこの戦争の最中からであった。

ベトナム戦争が終わると、それまでの戦争の経験や当時の政治的状況の変化から、軍は「エア・ランド・バトル」をドクトリンとするようになっていった。エア・ランド・バトルとは、優れた機動性と高い火力をもって、陸と空の両面で相互支援を行いつつ侵攻していく戦術である。消耗戦に陥らないように防御よりも攻撃を重視し、敵の正面戦力と後方戦力とを同時に叩くことで戦場の支配権をいち早く確立することを狙いとする。³³ そうした戦術を実行可能にするために、一九八六年に議会は指揮権を統合軍に集中させる法案を可決し、これまでの各軍参謀下における独自作戦を廃止して全軍の兵士、装備を効率よく運用するシステムを構築した。そしてさらに現在ではRMA (Revolution in Military Affairs) と呼ばれる、コンピュータやセンサーなどのデジタル最新機器の活用と、それによって得られたデータを陸・海・空・海兵の垣根無しに共有・活用することなどを中心とした、情報収集・分析能力の一段の強化により、現場における軍隊、ないし兵士ひとりひとりの活動は大きく変化している。しかし、戦場や基地から兵士がいなくならない以上、チャブレンの仕事が必要でなくなることはない。湾岸戦争は「ハイテク戦争」ともいわれるようにRMAの萌芽を全世界に知らしめるものだったが、この戦争でも陸軍だけで五六〇名ものチャブレンがアジア南部に派遣されたのである。

エラ・ギブソン・ホバートが南北戦争で初の女性チャブレンとして従軍し、そして解雇されたのは一八六四年であるが、それからちょうど一〇年後の一九七四年に、アリス・M・ヘンダーソンが正式に任命された初の女性チャブレンとなった。その後は女性チャブレンも急速に増えていき、一九七九年には夫婦でチャブレンをする「チャブレン・

カップル」も現れるようになっていった。東方正教会のチャブレンが現れたのは第二次大戦のときであり、最初の東方正教会チャブレンのウラジミール・ボリチエフスキーはプロテスタントのチャブレンとして分類されたが、ロシア正教、ギリシャ正教、シリア・アンティオキア正教の全体を代表するものとして任務にあたった。ベトナムでも正教会チャブレンはいたが、しかしその時も「プロテスタント」という肩書きにおいてであり、軍は一九七九年になってようやく東方正教会を個別の信仰グループとして認めるようになった。陸軍におけるチャブレンの教育訓練機関が「合衆国陸軍チャブレン・センター&スクール」という現在のそれと同じものになったのもこの七〇年代においてであり、戦地や基地における、チャブレンのより効果的な活動のために「ユニット・ミニストリー・チーム」(UMT)というシステムも考案された。これは一名のチャブレンと一名のチャブレン・アシスタントが組になり、それぞれが状況に合わせて効率的に役割を分担する方法である。チャブレンの活動に関して陸軍がまとめたマニュアル(*Field Manual 1-05: Religious Support*)においても、兵員たちへの宗教サポートはこのUMTを全ての活動の基本単位としている。彼らはただ日曜の礼拝を執り行うだけではなく、エイズ患者に対応するための訓練も受け、患者とその家族・友人たちをサポートするネットワークづくりの援助などもするようになった。また兵士だけでなくその家族たちに対する援助の重要性も再認識され、「ファミリー・ライフ・センター」をとおして、救急援助、家庭内暴力、自殺予防など様々な事柄に関するカウンセリングもできるような環境を整えていった。

一九八七年になると仏教の聖職者にもチャブレンとしての門戸を開くために、国防総省はアメリカ仏教徒教会(Buddhist Churches of America)を宣教母体として承認した。初めてムスリムのチャブレンが誕生したのは一九九三年で、陸軍チャブレンのアブドゥル・ラシード・ムハンマドがその人である。海軍がムスリム・チャブレンを採用

アメリカ軍のなかの聖職者たち

したのはその三年後、一九九六年であった。一九九八年にはヴァージニアのノーフォーク海軍基地にモスクも設けられている。現在の米軍にどれだけのムスリムの兵士がいるか正確な数は不明だが、すでに軍隊内で支給される食事は豚肉フリーのものも用意されるようになり、二〇〇四年の時点では一七名のムスリムのチャブレンがいた。社会主義体制の崩壊後には、ロシアやポーランドの軍隊にもチャブレン制度が導入され、アメリカ軍からチャブレンが派遣されて協力にあたることもあったようである。³⁴ キリスト教以外の宗教のチャブレンとして実際の登場が一番が遅かったのは仏教のチャブレンで、最初の人物は、二〇〇四年七月、ジャネット・グレイシー・シンという女性である（海軍）。

現在もアメリカ軍チャブレンは世界中で活動をしている。アメリカ国内の基地、日本を含めた諸外国にあるアメリカ軍基地、洋上の空母やその他の艦船の中、そして紛争のおきている地域の最前線で、チャブレンたちは兵士とその家族のための宗教サポート活動を展開している。兵器の発展や政治的状况によって軍全体のあり方は大きく変化するが、軍隊の一部であるチャブレンたちにもそれに合わせた様々な対応が求められている。現在の「対テロ」という問題にどのように向き合うかに関する軍の考え方も、チャブレンに新たな課題を与え、さらなる変革をうながしていくことであろう。

7 おわりに

アメリカの大統領は、しばしば演説などで宗教的な世界観・価値観をあからさまに表現する。それが真の信仰心か

らであれ、あるいは国民の支持を得るためのポーズとしてであれ、大統領と宗教を切り離すことが出来ないことはアメリカ文化における宗教の位置づけを端的に示している。だが同時に忘れてならないのは、大統領は単に政治のトップであるだけでなく、軍のトップでもあること、つまり「アメリカ軍最高司令官」(Commander-in-Chief)だということである。ブッシュ大統領は湾岸戦争の「砂漠の嵐」作戦を開始する前夜、ホワイトハウスにビリー・グラハム牧師を招き、翌朝までそばに留まらせたというが、あらためて軍の最高司令官として合衆国大統領を見るならば、この時のビリー・グラハムは実質的には従軍チャブレン的な役割を果たしていたのだと捉えてもよいかもしれない。³⁶

アメリカの従軍チャブレンの歴史を、アメリカ軍それ自体の歴史から切り離すことが出来ないのはいうまでもない。特に一般市民からなる民兵と聖職者との関わりが、後の常備軍におけるチャブレン制度の形成と発展の基礎になったことは重要である。アメリカ軍は、すでにあつた軍事組織に対して後からチャブレン制度を付け加えたのではなく、そもそも建国の当初からチャブレンを内包した形で軍事組織をつくっていたのである。そして幾度もの戦争を重ねていく過程で、チャブレンの役割の専門化と組織化を進めて現在に至っている。もちろんこのアメリカ軍チャブレン制度は、ヨーロッパの伝統、すなわち十七世紀や十八世紀のイギリスを中心とした、それまでの軍隊のあり方やキリスト教史とも不可分である。本稿ではそれらの点については詳しく触れないが、アメリカのチャブレン制度を他国のそれと比較していく際には、その国の軍事史や宗教史をその最も初期から検討していく必要があるだろう。

これまで、プロテスタントの白人男性のチャブレンだけでなく、女性、黒人、ユダヤ教やその他の宗教のチャブレンがいつどのように生まれたのかについてもそれぞれ簡単に触れてきた。それらを一瞥すると、アメリカ軍チャブレンの歴史は、そのままマイノリティ集団の軍への参入を認めていく歴史としても読むことができるかもしれない。³⁷チャ

ブレン制度史は単にアメリカの軍事史・宗教史であるだけでなく、国内における人種や民族の歴史の一側面でもある。しかし、軍のチャブレン制度は、必ずしも軍内部の構成人員（人種・性別・宗教）を素直に反映しているというだけの話ではない。例えばムスリムのチャブレンが初めて採用されたのは一九九三年であるが、それ以前にもアメリカ軍には既に大勢のムスリムの兵士がいた。するとこうした時期にチャブレンを採用したことには、湾岸戦争を意識した政治的な意図が全くないとは言い切れないであろう。このような例は以前にもあった。メキシコ戦争（一八四六―一八四八年）の際に、メキシコ側はこの戦争をカトリック対プロテスタントの聖戦として位置づけ、そうした認識を広めることで、アメリカ軍兵士の士気の低下をねらった。そこでアメリカ側はそうしたプロパガンダに対抗するために、あわててニューヨークの主教らにコンタクトをとり、カトリックのチャブレンを調達して部隊に派遣したのである。³⁸ここにも軍のチャブレン制度が純粹な宗教活動とは別に、戦略的な文脈で利用されている様子を推察することができる。

本稿ではチャブレン制度史の輪郭を見てきたに過ぎないが、チャブレンが具体的にどのような教育を受け、いかなる任務を指示されているかについての規定上・形式上の事柄を整理することも重要である。またチャブレン個々人が何を考え、また兵士一人一人が戦場でどのように自らの信仰と向き合ったのかという個人的・内面的な事柄も、軍隊と宗教の関わり、あるいは平和そのものについて考える上で重要であろう。前者については、軍から出されているチャブレンの任務に関するマニュアル等の内容を整理していくことによって明らかにすることができる。後者については、チャブレンの従軍体験記や伝記の類が多くあるのでそれらを分析していくことが有効であるだろう。今後はそうした作業をとおして、軍隊における宗教活動の内実を詳細に掘り下げていくことが課題である。

注

- 1 もちろん欧米には従軍チャブレン関連の本がいくつもあるが、チャブレン自身による従軍体験記の類も多い。学術研究として歴史学・社会学などの観点から軍隊付きチャブレンを扱ったものとしては、Doris L. Bergen (ed.), *The Sword of the Lord: Military Chaplains from the First to the Twenty-First Century* (University of Notre Dame Press, 2004).
- 2 Clarence L. Abercrombiell, *The Military Chaplain* (Sage Publications, 1977).
- 3 田中雅一「従軍牧師——あるいは越境する聖職者——」(青弓社編集部「従軍のポリティクス」青弓社、二〇〇四年、第七章)を参照。
- 4 この点についての概略は、古矢洵『アメリカ 過去と現在の間』(岩波書店、二〇〇四年)一〇三頁以下などを参照。
- 5 小熊英二『市民と武装——アメリカ合衆国における戦争と統規制——』(慶応義塾大学出版会、二〇〇四年)一八頁。
- 6 本稿の関心はあくまで軍隊における聖職者の問題である。アメリカにおける民兵の歴史それ自体に関することは、Allan R. Millett and Peter Maslowski, *For the Common Defense: A Military History of the United States of America* (Free Press, 1994); 鈴木滋「米国の「国土安全保障」と州兵の役割——9・11同時多発テロ以降の活動を中心に——」(『リファレンス』二〇〇三年七月号、五三—七八頁)および、河野仁「玉砕」の軍隊、〈生還〉の軍隊」(講談社、二〇〇一年)三七頁以下を参照。河野氏は同書の中で、アメリカにおける入営の社会過程や戦場での兵士の行動について詳しく分析している。同書二〇四頁および二四〇頁以下では、兵士と宗教とのかわりについても触れられている。
- 7 Cf. Allan R. Millett and Peter Maslowski, *op. cit.*; Warren W. Hassler, Jr., *With Shield and Sword: American Military Affairs, Colonial Times to the Present* (Iowa State University Press, 1982).
- 8 民兵から州兵への発展過程と現在の州兵の姿については、鈴木滋の前掲論文を参照。
- 9 Charles E. Grooms, *The Chaplain: Fighting the Bullets* (Ivy House Publishing Group, 2002), pp. 18ff.
- 10 キリスト教と戦争・軍隊の関係についての歴史については、次の文献が詳しい。Roland H. Bainton, *Christian Attitudes Toward War and Peace: A Historical Survey and Critical Re-evaluation* (Abington Press, 1960). 古代の教父と軍隊の関係に関する最近の研究としては、木寺廉太『古代キリスト教と平和主義——教父たちの戦争・軍隊・平和観——』(立教大学出版会、二〇〇四年)がある。

アメリカ軍のなかの聖職者たち

- 10 ちなみにジュネーブ条約の一般的な日本語訳では、*“chaplain”* は「宗教要員」と翻訳されている。
- 11 例えばその人物が陸軍所属のチャプレンで、階級は中佐 (*Lieutenant Colonel*)⁷ 名前が John Smith である場合だと、*“Army Chaplain (Lt Col) John Smith”* とどうかなんかで表記されるのが一般的である。
- 12 Keith E. Bonn, *Army Officer's Guide, 49th edition* (Stackpole Books, 2002), p. 184.
- 13 以下で概観するチャプレン制度史については、陸軍のチャプレン訓練機関によってもとめられている次の文献を主な参考資料として参照。US Army Chaplain Center and School, *Brief History of the United States Chaplain Corps*, (<http://www.Usachcs.army.mil/HISTORY/Brief/TitlePage.htm>) Last Revised 05 March, 2004. (以下この文献は *BH* と略記する。)
- 14 Department of the Army, *Field Manual 16-1: Religious Support* (1995), p. vii. この *Field Manual* は「野戦教範」とも訳られるアメリカ軍のマニュアルで、ライフルや拳銃の使用法から、砂漠やシヤンダルといった特殊環境における戦闘方法、また化学兵器への対処法から軍法に関することまで、兵士のために軍のあらゆる事柄についてまとめられている一連の教科書である。膨大な種類の *Field Manual* が作られ、かつ改訂が重ねられており、チャプレン向けに作られた「宗教サポート」という巻もその中の一つである。この *Field Manual 16-1: Religious Support* は、二〇〇三年に内容やレイアウトが大幅に改訂され、分類番号も *16-1* から *1-05* へと変更された。(以下この *Field Manual* は *FM* と略記する。)
- 15 *Cf. BH*, Chapter 1.
- 16 *Cf. ibid.*, Chapter 1.
- 17 *Cf. FM 1-05: Religious Support*, Chapter 1. Charles E. Grooms, *op. cit.*, pp. 17 ff.
- 18 *Cf. BH*, Chapter 2.
- 19 ただし軍において「旅団チャプレン」が正式に承認されたのは一八一六年である。
- 20 Diana L. Eck, *A New Religious America: How a “Christian Country” Has Become the World’s Most Religiously Diverse Nation* (Harper Collins Publishers, 2001). (池田智訳『宗教に分裂するアメリカ——キリスト教国家から多宗教共生国家へ——』明石書店二〇〇五年) 六七四頁。
- 21 実際の徽章のデザインについては下記文献の図を参照。Keith E. Bonn, *op. cit.*, p. 183.

- 22 Cf. *BH*, Chapter 2.
 23 南部連合軍には約六〇〇名から一〇〇〇名のチャブレンが従軍し、少なくとも二五名が戦死たとされている。
 24 Cf. *BH*, Chapter 3.
 25 Cf. *BH*, Chapter 4.
 26 ローザンヌにあるブレントの記念碑には「アメリカ遠征軍チーフ・オブ・チャブレン一九一七—一九一九」と刻まれているが、「チーフ・オブ・チャブレン」の役職が設置されたのは一九二〇年からであり、彼が公式にその肩書きを持つことは実際にはなかった。
 27 Cf. *BH*, Chapter 6.
 28 第二次大戦物のアメリカ映画『*Saving Private Ryan*』（邦題：『プライベート・ライアン』、監督：ステイブ・スピルバーグ、一九九八年）や『*The Thin Red Line*』（邦題：『シン・レッド・ライン』、監督：テレンス・マリック、一九九八年）などには、戦場の最前線で活動する従軍チャブレンの様子も、わずかにではあるがはっきりと描かれている。
 29 Cf. *BH*, Chapter 6.
 30 ちなみにこの第二次大戦の時期には、『神と国のために』（*For God and Country*）と題された陸軍の訓練映画も撮影されたのだが、当時ハーバードにおかれていた訓練所で学ぶ四名のチャブレンたちを描いたシーンのうち、カトリック司祭の役を演じていた役者は、後に合衆国大統領になるロナルド・レーガンなのであった。
 31 *BH*, Chapter 7 には、次のようなプロテスタント平信徒のグループが挙げられている。Protestant Men of the Chapel (PMOC), Protestant Women of the Chapel (PWOC), Protestant Youth of the Chapel (PYOC), カトリックやユダヤ教のグループ名は不明。
 32 エミール・カバウンは朝鮮戦争に従軍した陸軍のチャブレン（カトリック）。戦場では勇敢に兵士たちの宗教的ケアをし、自らが戦争捕虜になってからも同じ捕虜の仲間を支え続け、一九五一年に捕虜のまま死んだ。軍からは殊勲十字章を授与され、ヴァチカンによって「神の僕」（Servant of God）に列せられた。詳しくは William L. Maher, *A Shepherd in Combat Boots: Chaplain Emil Kapoun of the 1st Cavalry Division* (Burd Street Press, 1997) などを参照。
 33 Cf. *FM 100-5: Operation*, 1986.
 34 田中雅一、前掲論文、一五六頁。

アメリカ軍のなかの聖職者たち

35 森孝一『『宗教から読む「アメリカ」』(講談社、一九九六年、六九―七〇頁。

36 アメリカの大統領と宗教の関係については、蓮見博昭『宗教に揺れるアメリカ』(日本評論社、二〇〇二年)、Richard Pierard and Robert Linder, *Civil Religion and the Presidency* (Zondervan, 1988); Robert Linder, "Universal Pastor: President Bill Clinton's Civil Religion," in: *Journal of Church and State*, 38.4, 1996. (堀内一史・大養孝夫・日影尚之訳『アメリカの市民宗教と大統領』麗澤大学出版会、二〇〇三年) などを参照。

37 同様の事柄については田中雅一氏も指摘している。「白人から黒人、先住民、あるいは日系アメリカ人など、チャプレン制度の歴史から軍人の構成人員の変化も推察できるのだ」(田中雅一、前掲論文、一五七頁)。アメリカの軍隊と人種問題に関しては、小熊英二の前掲書(二五一―一五二頁)なども参照。

38 Cf. *BH*, Chapter 2.